

## 朝河貫一と1908年の国際日本学：朝河貫一著「なぜ、どのようにして、アメリカにおける利を活かして日本史を学ぶのか」訳注と解題

佐藤雄基

(\*凡例：原文の「注」は翻訳本文中に【注1】のようなかたちで記載した。解題との通して付けた注は訳者注である。また、参考までに原文の表記を残した箇所は括弧 ( ) で、訳者が説明として補った語句・説明は [ ] で囲んだ。)

【翻訳】朝河貫一著「なぜ、どのようにして、アメリカにおける利を活かして日本史を学ぶのか」

日本の歴史は外国ではほとんど知られていないので、もっと大規模に研究するように主張しなければならない。ロシア人が日本の国民生活にもっと洞察をもっていたならば、近年の戦争〔日露戦争〕は多分起こらなかっただろうといわれている。それはともかく、ここアメリカにおいて、二国間の関係がますます重要になっているのに対して、日本人の歴史と国民性に関する一般的な理解が不十分すぎるだろうということは、近年ますます明らかになっている。諸国の幸福のためにも、よりよい知識が必須なのである。

しかしながら、こうした実際的な必要とは別に、歴史学徒は日本史に、皆から変わらぬ関心をもたれる論点を多く見出すことだろう。たとえば、制度的にみて、日本は国家の歩みを家父長制的国家として始めたが、その組織の頂点には天皇 (emperor) [「天皇」号成立以前、大王] がいた。国内外の環境が七世紀にはこの体制を維持できないものにしたとき、中国の唐帝国の集権的官僚制をモデルにして国家は再編された。この人為的な改革〔645年の大化改新〕につづいて、徐々に起こって予見できない社会の変化が500年にわたった。その変化の中で、初期中世の西欧の封建化に似た過程が、類似の環境のもと、類似の原則にもとづいて起こった。最終的に、1185年には、封建制度が国家の支配機構として天皇によって認められた〔所謂「文治守護地頭勅許」〕。それに続く400年の間、封建制度は発展を続け、1600年〔関ヶ原の戦い〕には徳川将軍による精巧な封建政体 (polity) [江戸幕府の幕藩体制] に達した。700年にわたるほとんど切れ目のない支配を経て、封建制もまた外国の圧力と国内の混乱のもとで、19世紀には維持できないことが明らかになった。封建制は1868年に、封建制の上にいる〔封建制とは異なる〕天皇の力と、そして封建制の内部からあらわれた武士の不平分子との結合した力によって、打倒された。それにつづいて、ヨーロッパの制度を積極的に採用する時代〔明治時代〕となった。家父長制から官僚制へ、官僚制から封建制へ、そしてさらにまた立憲的な政体への移行が、それに対応する社会的経済的な変化に伴うものだったことは、いうまでもないだろう。それぞれの段階において、学生は普遍的な重要性をもつ教訓を得て、そのいくつかは、類似性により、あるいは対照的なことから、西洋史の重要な特徴を明らかにすることに役立つことさえあるだろう。

日本の道徳面そして精神面での成長は制度面でのそれよりもはるかに興味を引くように思われる人もいるかもしれない。ここで再び、熱心に受容し、同化させ、そして独自の表現を行う時代が繰り返されているのが観察できるのである。日本の国民的信仰 (cult) は、のちに神道と呼ば

れるが、アジア大陸の文明 (civilization) が到来するよりも前に形をなし、神道と密接に結びついた天皇の地位 (emperorship) とともに、国民の永続的な伝統となった。インド思想と中国文化は、6世紀から流入し始めたが、支配階級の格調を高め、8世紀と9世紀の野心的な芸術的活動を刺激した。これに続いて、何世紀も続いて事実上の大陸から孤立し、その孤立のなかで、その前の時代に〔大陸から〕導入された教養は徐々に上流社会の生活の中に同化していった。11世紀までに、仏教でさえ、その教義と儀礼において大部分は日本的になった。そして、仏教寺院は帝国における支配的な経済的、政治的勢力に成長した。そののち封建的階級〔武士〕からとてつもなく大きい反応が起こり、封建的階級は国土全体で自己形成し、12世紀末には国家の支配勢力となった。これらの階級の勃興と同時に、仏教と仏教美術の新たな形態〔禅宗〕が中国からやってきており、それらの単純さと力強さは武士 (warriors) の頑強な精神に対応するものであった。彼ら武士 (men of arms) は、粗野であるが強烈な名誉心を伴い、新時代の道徳的風潮を作り出した。1600年以降、封建的支配者は当初、儒学を基礎においた。儒学は1000年以上前に日本にきており、封建社会における実際的な倫理的関係の最良の擁護者であった。そして、支配者たちは武士の道徳律〔武士道〕を公式化するために儒学の教訓を利用した。それと同時に、この時代から、外国を排除した新たな時代〔所謂「鎖国」下の江戸時代〕を通して、生活に関する一般的な文化と芸術が大変多角化し、すべての階級の人びとの間に広く普及した。19世紀半ば、日本が強制的にヨーロッパの科学とキリスト教の影響のものにおかれると、文化的な統一は再び損なわれた。これらの新しい要素を日本が吸収するだけの時間は今のところまだ経っていない。日本文化のこれらの一連の時代をたどると、それぞれの時代を特徴づけ、決して他の時代にはうまく再現することのない、芸術の形式と生活の様式があることに気づくだろう。それぞれの時代は同時に、実りある研究のために無数の問題を提供してくれる。

もしヨーロッパの言語で書かれた文献から日本史のもつ、以上に述べたような、あるいはそれ以外の側面を研究しようとするならば、書かれてきた無数の著作のなかに、重要な史料の翻訳が僅かしかないことに落胆することだろう。しかしながら、無数の文献から選別して読むことによって、ある程度の知識を得ることは、学習者にとっては、実行不可能ではないだろう。たとえば、一般的な歴史に関していえば、パピノ (Papinot) 【注1】による必須の辞書の助けを得て、ブリנקリー (Brinkley) 【注2】やマゼリエル (Mazeliere) 【注3】を読むとよいだろう。これらの導入的な著作のあとは、専門的な論点に注意を払って、ヴェンクシュテルン (Wenckstern) の書誌【注4】で言及されているその分野の著作に精通するのがよいだろう。しかしながら、その主題が何であれ、日本アジア協会【注5】とロンドン日本協会【注6】、そしてドイツ東洋文化研究協会【注7】の刊行物にあたるのがよいだろう。専門的な話題の研究論文 (monograph) に関して、ヴェンクシュテルン〔の書誌〕において言及されていないものはほとんどないが、それらの〔書誌に漏れた文献の〕相対的な価値は、訓練された学生であればだれでもすぐに判定することだろう。広範囲にわたる歴史の局面すべてにおいて、どれほど優れた仕事であってもここでは列挙しきれないだろう。

オリジナルの言語における史料<sup>(1)</sup>は現在、いかなる重要な領域においても、満足のいく調査のために唯一頼りになる資料である。史料を用いることのできる人々たちに対しては、日本国外の如何なる場所よりも日本語の歴史資料の、より広くよりよく選択されたコレクションが議会図書館

とイエール大学図書館にあると喜んでお伝えしたい。議会図書館に保管された九千冊を超える書物の性格は、1907年の〔議会〕図書館の年次報告において筆者によって簡潔に記述されている<sup>(2)</sup>。ここでは、そのコレクションは、日本の歴史地理及び宗教史や文化史一般に特に強いと指摘することだけでよいだろう。イエールのコレクションは、ほとんど同じ数の書物から成るが、原史料が豊かで、制度と芸術という二つの歴史分野の資料も豊かである。その史料は四分類に分けるのがよいだろう。第一の分類では、オリジナルから拓本をとったものを少し含む、石や金属で作られたモニュメントに記された文〔金石文〕が言及できるだろう【注8】。第二の分類は、原文書から構成される。8世紀前半以来全ての時代をカバーしており、多くの数の写本【注9】とファクシミリ（複製）のほかに、少なくない原文書【注10】を含む。第三の分類には、歴史時代全てにわたる非常に多くの数の年代記、回想、日記があり【注11】、そのすべてが根本史料の一つである。これらは政治的な性格のものが主で、宗教組織【注12】と対外関係【注13】に関連するものも少しある。第四の分類は、絵入り本【注14】や絵巻【注15】の包括的なセットである。言葉で表された言説を研究するだけではほとんど分からない社会的生活の諸相をそこから集めることができるだろう。歴史地理の書物は議会図書館ほど多くはないけれども、日本の陸軍省・海軍省と〔農商務省の〕地質調査所からイエールに寄贈された1000点以上の地形図は、古い歴史の研究において大変な価値があるだろう<sup>(3)</sup>。法と制度に関する書物は特に数多く、収集者は芸術の分野と同じく、この分野において特別な努力を払った。もう一つの分野、商業史は、不完全であるけれども、私が見てきた如何なる日本の図書館よりもよく集められている。建築や古銭学、宗教、文学、慣習（customs）や作法（manners）、礼儀や儀礼、武器や戦術、紋章、系図などのような歴史の補助学が、レファレンスの文献と同じく、集められていることは言うまでもない。すでに述べた書物の多くが流布しておらず、大部分は写本であり、おそらくは60点1000分冊（fascicules）を下回らない、最善のものを含む相当数の写本が、原本か、そうでなければ良質の写本から、その国の異なる場所において個々に写されたということを理解してほしい。特別な努力が、写真の優れたコレクションと写真以外の形式での芸術作品の複製を保存するためになされている。何故ならば、これらの物は多くの場合、その主題だけではなく、その制作の細部において、それらが作成された時代の精神を表現しているように見えるからである。早い時代の見本には、日本の文化に対するギリシアや西アジアの間接的な影響の存在を証明するという、面白さが加わる。現在のコレクションは、これらのアイディアを鑑みてつくられている。〔つまり、〕写真、拓本、ファクシミリの複製、細部の技術面に関する研究から構成されており、その多くが専門家によって個々になされたものである。

イエールのコレクションに関して簡潔に記述し、そして議会図書館のコレクションについてはより簡潔に述べるにとどまったが、どちらのコレクションも完璧であるには程遠いというのが妥当である。しかし、学生はワシントン〔の議会図書館〕とニューヘイブン〔のイエール大学〕の日本語資料を用いて、時間を有効利用し、そして或る主題に関しては満足のいく時間を過ごせるかもしれない。

ASAKAWA, Ph. D.

## 原注

- (1) 〔原注129頁注3〕エドモン・パピノ（Jacques Edmond-Joseph Papinot）編『日本歴史地理辞典』（第2版、東京など、1907年）。著者はこの著作の英語版が準備中であると筆者に書い

てきている<sup>(4)</sup>。

- (2) 〔原注129頁注1〕、キャプテン（船長）・フランシス・ブリンクリー（Francis Brinkley）『オリエントシリーズ：日本、その歴史と芸術、文学』12巻本のうち1－4巻（ボストン、1901－2年）<sup>(5)</sup>
- (3) 〔原注129頁注2〕マズリエル侯爵（Antoine Rous, marquis de La Mazeliere）『日本、歴史と文化』全五巻のうち1－3巻はすでに刊行された（パリ、1907年）<sup>(6)</sup>
- (4) フリードリヒ・フォン・ヴェンクシュテルン（Friedrich von Wenckstern）編『日本帝国書誌』2巻、第1巻（ライデンなど、1895年）、第2巻（東京など、1907年）<sup>(7)</sup>。
- (5) 『日本アジア協会紀要』（1872年創刊、不定期刊行、東京）<sup>(8)</sup>。
- (6) 『ロンドン日本協会雑誌』（1893年創刊、不定期刊行、ロンドン）<sup>(9)</sup>。
- (7) 『ドイツ東洋文化研究協会会報』（1873年創刊、東京）<sup>(10)</sup>。同様に、『仏文雑誌』（1892年創刊、月刊、東京）<sup>(11)</sup>、『国際極東〔東洋カ〕学会会議会誌』<sup>(12)</sup>（1873年創刊）の日本に関する記事、『通報』（1890年創刊、ライデン）<sup>(13)</sup>、『東亜』（1898年創刊、月刊、ベルリン）<sup>(14)</sup>。
- (8) 〔原注130頁注1〕これらの碑文は、その多くは議会図書館のコレクションに含まれる印章や花押、ファクシミリとともに、史料（source）の重要なまとまりを形成する。銘文の内容が多数の場合、その主題にとってあまりに好都合であるために信頼することができないとしても、それらはしばしば歴史に重要な光をなげかけてくれるし、そうでなくても、社会史、文学史、美術史にとって価値のある史料である。
- (9) 〔原注130頁注2〕これらの間で、最も価値のある選集（selection）は、『古文零聚』と題され、東寺という仏教寺院に伝わり、（ほとんどが土地の権益に関連する）無数の古文書から成り、歴史家の伴信友によって（おそらくは自筆で）編纂された<sup>(15)</sup>。東京帝国大学史料編纂掛編『大日本古文書』は、200冊で完結すると予想されており<sup>(16)</sup>、定期的にイェールに届いている。
- (10) 〔原注130頁注3〕これらのなかでは、8世紀に書写された（議会図書館はこの時期の巻物4点をもつ）仏教経典、日記を伴う1423－24年の暦（almanac）<sup>(17)</sup>、15世紀後半の20点の文書〔平氏文書〕、17世紀から19世紀前半までの京都の市政に関連する多数の文書〔京都古文書（下京文書）〕などを挙げることができる。
- (11) 〔原注130頁注〇〕この分類の記録は、以下のように分類できる。（1）京都の公家貴族の日記。日本国家の中央組織、つまり天皇の地位が、全時代を通じて絶えず続き、不動であったという事実に基づいて、その組織の周辺に公家貴族の永続的な階層が群がっていた。貴族たちはある程度の文化と優雅さをもち、そして彼らの多くは系統的に日記をつけていた。予想される通り、これらの日記の一部は、実際にそうしたように、文化や権力の中心にあった人々や物事を描いており、政治史と社会史の第一級の史料である。封建時代の間、政治権力が封建的階級に下降すると、貴族たちの日記は時として、天皇と封建君主（feudal suzerain）の関係を明らかにしている。（2）1600年以前の封建的階級の記録は数としては少ないが、京都の貴族たちの日記に比べて、重要ではないことはない。封建的な（階級の）記録は、1600年以降急速に増えている。（3）封建時代における何人かの偉大な僧侶の日記は、封建的支配者と親しい間柄であり、とても価値がある。（4）日本は例外的に、日本で「随筆」の名で知られる分類の文学作品が豊かである。あらゆる種類の雑多な主題に関する覚え書きで構成されていて、しばしば順序について明白な秩序をほとんど持たずに書きとどめられている。これら

(32)

の断片的な著作は無数にあり、時には数百以上の章をもち、しばしば非常に価値のある一次的な情報を含むこともある。

- (12) 〔原注130頁注4〕たとえば、『息距編』〔徳川斉昭編、1860年〕(カトリック弾圧に関連、22巻)<sup>(18)</sup>、『大谷本願寺通記(紀)』〔玄智著、1791年成稿〕(西本願寺という仏教寺院 (temple) の歴史、7巻<sup>(19)</sup>)。後者はその寺院で親本 (the original) からコピーされ、コピーしたときに現存する写本は他になかった(議会図書館は『高野山風土記』〔紀伊統風土記 高野山部)<sup>(20)</sup>をもっている。高野山の仏教寺院の歴史で、約百冊あるが、その寺院で親本から特別に写したものである)。これらの仏教教団 (institutions) は大きな歴史的要因となっていた。
- (13) 〔原注130頁注5〕たとえば『朝鮮通交大紀』〔松浦霞沼撰、1725年〕は、朝鮮外交に関するもので、10巻本。特別にコピーしたものである<sup>(21)</sup>。
- (14) 〔原注131頁注6〕たとえば、『人倫訓蒙図彙』六巻本<sup>(22)</sup>〔画は蒔絵師源三郎、1690年刊〕、徳川統治下の繁栄の時代における異なる職業の人びとを描いている(議会図書館にはこの種の作品が多数ある<sup>(23)</sup>)。
- (15) 〔原注131頁注7〕これらの巻物は手稿で、その一部は最も高い価値をもつ史料のひとつである。(議会図書館にはイェールと重複していない巻物が多くある<sup>(24)</sup>)。

【解題】 朝河貫一と1908年 (1907-1908) の国際日本学

## (1) 書誌情報とタイトル

この論説“Why and How Japanese History may be studied with Profit in America”(「なぜ、どのようにして、アメリカにおける利を活かして日本史を学ぶのか」)(以下、Profit論文)は、イェール大学の講師であった朝河貫一(Kan'ichi Asakawa, 1873-1948)が1908年1月、*Washington Historical Quarterly* (『季刊ワシントン史学』), vol.2 no.2に発表した5頁ほどの短い論説である<sup>(25)</sup>。この論文が実際に執筆されたのは1907年8月の朝河の帰米以降であろうが、1908年(1907-8)当時の日本国内外における日本研究(国際日本学)の状況が分かる資料として興味深いため、ここに紹介する次第である<sup>(26)</sup>。

Profit論文の難しさは、まずタイトルをどのように解釈するのかにある。“with Profit”の部分を「利を活かして」と訳したが<sup>(27)</sup>、このように解釈した理由については以下、本解題において論じていく。アメリカにおけるProfit(利)という言い方自体が晦渋である。日本国内は当然のこととして、大英博物館などのあるイギリスに比べても、日本史研究に必要な文献・史料は不足しており、アメリカにおいて日本研究をすることは不利であると考えるのが、おそらく当時のアメリカにあっても常識的な見方ではなかっただろうか<sup>(28)</sup>。それでは何故、朝河はこのようなタイトルをつけたのだろうか。単なる強がりであったのか、それとも何らかの自信に裏づけられたものだったのだろうか。そのことを考えるために、本稿では1908年当時の国際的な日本研究の状況についてもみていくことにする。

## (2) 著者朝河貫一：1908年当時を中心にして

まず朝河のキャリアについて簡単に確認することにした。朝河は20世紀前半にアメリカで活躍した歴史家として知られる。日本封建制に関する史料を英訳して詳細な注釈を付した主著『入来文書 (*The Documents of Iriki*)』(1929年)で知られ、英語圏における日本史研究・比較封建制研

究の開拓者となり、イエール大学で日本人初の正教授となった。また、日露戦争・第二次世界大戦の際、在米日本人知識人として個人的活動を行ったこと、アメリカ図書館における日本語蔵書構築に果たした役割などが注目されるなど<sup>(29)</sup>、多分野にわたって活動した人物である。

朝河は1902年にイエール大学大学院を修了したのち、同年には母校ダートマス大学の講師になった。1904年に日露戦争が始まると、同年11月に *The Russo-Japanese Conflict: Its Causes and Issues* (『日露衝突：その原因と争点』) を刊行し、アメリカにおける日本研究専門家として、広く名を知られるようになった<sup>(30)</sup>。

朝河はアメリカに大英博物館に匹敵する日本語図書館の設置を構想し、様々な働きかけを行った結果、アメリカ議会図書館とイエール大学図書館からの依頼を受けて、1906年2月から翌年8月にかけて日本関係図書収集のため一時帰国した。朝河が図書収集を自ら提案する背景には、朝河が大学院生時代、イエール大学図書館において日本語・中国語の図書目録を作成するアルバイト経験があり、アメリカの図書館にある日本資料が日本研究に不十分であることを認識していたからだという<sup>(31)</sup>。そして、1907年8月に帰米すると、イエール大学の講師として9月からは日本史・日本制度史の授業の担当者となるとともに、イエール大学図書館日本・中国コレクション (Japanese and Chinese collections) のキュレーター (Curator) に就任した。以後、1948年で没するまで、朝河はイエールにとどまり、イエール大学における東アジア関係図書の蒐集・整理に従事することになる (歴史学の教員としては1937年正教授、1942年名誉教授)。1906-1907年の日本語図書蒐集は朝河の人生において大きな転機になったが、この事業が可能になった背景には、日露戦争を契機にして、アメリカでも日本への関心が高まったことに加えて、朝河自身が日本事情の専門家として名声を得ていたことは無視し得ないだろう。

1907-1908年の「イエール大学図書館長年次報告」によると、717点1351冊から構成されていた日本コレクションに、朝河は3578冊8120点の書籍、1741点の地図、742点の写真・図表、多くの巻物をもたらしたという<sup>(32)</sup>。さらに年次報告では、その書籍は大別して、現代日本の情勢と日本文化史の二つに分かれるが、数としては後者が多く、制度史に特に強いこと、写本が多いことなどが、蒐集コレクションの特徴として説明されている。Profit 論文よりも詳細なところもあるが、内容の重なる個所も多い<sup>(33)</sup>。

### (3) Profit 論文の内容

以上の状況を踏まえて、Profit 論文の内容をみていこう。

「なぜ (Why)」と「どのようにして (How)」は論説全体にかかわるものであるが、前半では、「なぜ (Why)」アメリカにおいて日本史を学ぶのか、後半では「どのようにして (How)」アメリカで学ぶメリットがあるのか、に比重をおいて論じているように思われる。それぞれみていこう。

前半 (Why) の冒頭では日米関係・国際関係における相互理解のために、国際社会への新たな参入者である日本の歴史を学ぶ必要性を説いている。だが、朝河の力点は、こうした実質的な目的だけではなく、国家の制度あるいは宗教・文化という諸側面において、人類の発展の歴史を学ぶ材料として日本史が有益だと説く点にある。「それぞれの段階において、学生は一般的で、重要な教訓を得て、そのいくつかは、類似性により、あるいは対照的なことから、西洋史の重要な特徴を明らかにすることに役立つことさえあるだろう。」という一節に象徴されるように、当時のアメリカの大学における歴史研究は西洋史 (特にイギリス史) 中心であり、そのなかで歴史家として身を立てようとしていた朝河にとって、日本史の知見が人類の歴史 (といっても、それは西洋

の歴史を基準としたものであったが)に貢献するものであると強調することが必要だった<sup>(34)</sup>。こうした朝河の主張は、(アメリカ人読者を対象にした Profit 論文では触れられていないが)日本国内における日本史研究者に対しても、思想の自由をもって、人類の一般的な歴史のなかで日本史を考察できることが、アメリカにいる自分の強みであると朝河が主張していたこととも符合するものだろう<sup>(35)</sup>。さらに朝河は、日本文化には中国・インドなどの外来文化が流入し、「熱心に受容し、同化させ、そして独自の表現を行う時代が繰り返されているのが観察できる」と論じており、単に日本史にとどまらず、世界史の観点から日本文化・宗教の歴史を学ぶ面白さを強調している。

後半の「どのようにして (How)」では、欧米における日本研究の基盤となる基本書・書誌・研究雑誌の紹介を行い、そしてイエール大学の日本語コレクションの紹介を行う(議会図書館の日本語コレクションについては、年次報告の参照を求めている)。

特に紹介されている研究雑誌が、イギリス・ドイツ・フランスのものであることに注意したい。日本研究におけるアメリカは後発であった。特にイギリスは、外交官が赴任地の言語・文化を研究する伝統もあって、当時日本研究の中心だったし、フランスも東洋学の中心だった。だが、文化・宗教などが中心で、朝河の専門である制度史・封建制研究に関していえば、少なくとも朝河の目には不十分なものに映っていた。こうした国際的な日本研究の状況のなかで、朝河はイギリスの日本研究をライバル視していた節もある。このような背景を念頭において、この論文における「日本国外の如何なる場所よりも」広範囲で、質の高い日本語の歴史資料コレクションが議会図書館とイエール大学図書館にあるという朝河の主張を読み解く必要があるだろう。

さらに朝河は、ヨーロッパだけではなく日本に比べてもアメリカには優れているところがあると考えていた。すなわち「もう一つ分野、商業史は、不完全であるけれども、私が見てきた如何なる日本の図書館よりもよく集められている。建築や古銭学、宗教、文学、慣習 (customs) や作法 (manners)、礼儀や儀礼、武器や戦術、紋章、系図などのような歴史の補助学が、レファレンスの文献と同じく、集められていることは言うまでもない。」という朝河の記述からは、同時代の日本国内の図書館に比べて、体系的な書籍蒐集を行ったことへの自負を見出すことができる。アメリカにおいて日本史を学ぶことの強み(メリット)の強調は、朝河自身が蒐集した図書に裏づけられたものだった。Profit 論文が書かれて発表された1907-8年は、朝河がイエールに移った直後であったが、自らの手で蒐集した日本語コレクションへの自負、そして、蒐集図書を基盤にして自らの手で今後発展していくであろうアメリカ・イエール大学における日本研究の将来への希望が、この短い論説のなかに凝縮されている。

#### (4) 1908年当時の海外の日本研究

ここで、朝河が意識していたであろう、西欧の日本研究の状況についてみていこう。朝河の把握していた範囲内という留保はつくが、雑誌の創刊年などから、西欧における日本研究には、盛り上がりの時期が2つあったことがみえてくる。

第1のピークは、1873年頃である。1872年に日本在留のイギリス人たちを中心とした日本アジア協会が結成され、その翌1873年には(おそらく日本アジア協会を意識しながら)日本在留のドイツ人によってドイツ東洋文化研究協会が結成された。1873年に開催されたウィーン万国博覧会には日本が初参加したが、同年にパリで開かれた第一回国際東洋学会議は、フランスにおける日本学の開拓者といわれるレオン・ド・ロニ(Léon de Rosny)が議長となり、「会議全体におい

て日本関係の論文が飛び抜けて多」かったというほど、日本への関心は高まっていた<sup>(36)</sup>。日本は明治維新を経て、1871年から73年にかけて岩倉使節団が欧米に派遣されていた。西欧の側においても日本への関心が高まりをみせていた。

だが、レオン・ド・ロニのような先駆的な学者は別にして、全体としてみれば、欧米における日本研究は、16世紀以来の伝統があるとはいえ、当初は宣教師、そして外交官によって担われていたことに留意する必要がある。そうした事情は19世紀後半の幕末・明治期においても同様で、明治期に日本に招かれた所謂「お雇い外国人」による日本研究も始まっていたが、欧米の大学における専門的な教育・研究体制はなお整っていなかった。そして、日本語学習の障壁があったため、外交官として日本に滞在して日本語を習得した日本専門家(ジャパノロジスト)をのぞいて、欧米の研究者にとっては日本研究に着手するのが難しかったという事情も見逃せない<sup>(37)</sup>。

そうした状況のもと、1890年代以降、欧米の大学で学んだ日本人留学生たちが、近代学問の方法論をもって、母国語である強みを活かして日本をフィールドにした研究を発表することになる。たとえば、ドイツ・ボン大学にて学位申請論文「政治的・経済的關係からみた日本の領域制度及び自治発達史」(1894年)を提出した大久保利武、ミュンヘン大学に学位申請論文「日本における経済活動の発展」(1900年)を提出した福田徳三が代表例であろう。こうした留学生たちの日本研究は、海外における学術的な日本研究の出発点の一つとなったが、朝河はその一人だった。大久保や福田に比べれば、日本に帰国せず、アメリカにとどまって研究者人生を送ったことが、朝河の特徴であった。それだけに、朝河はアメリカで日本史を学ぶことの意義を誰よりも強く主張せざるを得なかったのではなかろうか。1905年にアメリカ人女性と結婚し、1906年の日本帰国中には父正澄も亡くしていた(1906年9月20日)。1907-8年当時の朝河には、日本に帰国するという選択肢はなかっただろう。

そして、朝河がアメリカにおける日本専門家として歩みだした時期は、欧米における日本研究の盛り上がる第2のピークに重なっていた。すなわち、日清・日露戦争の時代である。前述のように、1890年代以降、朝河をはじめとする日本人留学生・日本人学者による学術的成果が発表される一方、朝河も指摘しているように、ブリンクリーやマズリエルによる日本通史・基本書が刊行されている(注1・2)。また、日本に滞在する西欧人による学会ではなく、ヨーロッパを拠点にした日本研究の学会が設立され始めた。Profit論文で朝河が取り上げているように、1893年には日本協会(the Japan Society)がロンドンで設立された。また、在独の日本人によるものであるが、1898年にはベルリンでドイツ語雑誌『東亜』創刊された。さらに、朝河はProfit論文のなかで取り上げていないが<sup>(38)</sup>、20世紀初頭にはフランス語圏においても、「日本の文化を伝えるのに大きな役割を果たした」と評される二つの雑誌が創刊されたことも指摘しておきたい。一つはインドシナを拠点とするフランス極東学院の『フランス極東学院紀要』(1901年創刊、*Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*)で、もう一つは1900年のパリ万国博覧会を機に設立されたパリ日仏協会の『巴里日仏協会会報』(1902年創刊、*Bulletin de la Société franco-japonaise de Paris*)である<sup>(39)</sup>。朝河のいるアメリカでは、1907年5月にジャパン・ソサエティー(Japan Society)がニューヨークで結成されたが、所謂学術団体ではなく、社交機関や日本文化紹介の役割を果たした。

こうした海外における日本研究の高まりに対して、日本国内からも働きかけが見出されるようになる。ヴェンクシュテルンは1895年に『大日本書誌』を刊行した後、1903年から教師として日本に招かれたが、日本において政治家・学者などの協力を得て、『大日本書誌』第二巻を完成させている。これに関しては「日露戦争期およびその後の国際世論の動向をにらんだ広報外交活動の



一環として、日本の指導的立場にある政治家・官僚、学識経験者が積極的に協力した」<sup>(40)</sup> ことが指摘されているが、1906年から翌年にかけての朝河貫一の日本帰国と議会図書館・イエール大学図書館のための日本語図書蒐集についても、日本政府、地方役所、学者・寺院・学識経験者の協力があり、特に文部大臣牧野伸顕と東京帝国大学史料編纂掛の三上参次の名前が挙げられている<sup>(41)</sup>。日清・日露戦争、特に日露戦争を契機とした欧米における日本への関心の高まりとともに、日本側が広報外交・文化外交として海外の日本研究に対して戦略的な働きかけをした側面にも注目する必要があるのだろう（もちろん組織的・系統的なものではないという限界面に留意する必要があるが）。そうした双方向的な動きのなかで朝河は、媒介者として独自の役回りをつとめ、地位を築いていく。

このように日露戦争の前後の時期に一種の日本ブームがあった。朝河はその波に上手に乗り、新たに日本関係の講義を開設したアメリカの研究大学（イエール）にポストを得て、研究の基盤となる図書館蔵書構築を実現し、アメリカで日本研究を行うことへの自負をもっていた。先行する西欧人の日本研究を意識しながら、アメリカの大学における学術的な日本史研究の立ち上げを宣言するものとして、1908年初頭の朝河貫一の論説を読み解くことができるのである。

#### 注

- (1) 原文 historical source なお source は史料、material は資料と訳した。
- (2) *Annual report of the Librarian of Congress 1907*, pp.24-29. 朝河自身の報告書が引用されている。イエール大学の蔵書が制度史に力点をおいたのに対して、議会図書館のための蒐集図書では宗教（仏教・神道）に重点を置いていた。
- (3) 陸軍省作成の地形図 (topographical maps) (Tokyo, 1891-1907) が現在、イエール大学図書館スターリング記念図書館 Folio Collection にある（請求番号 Fgepec A900 1-12）「1476 sheets in 12 portfolios」とあるので1000点以上という朝河の記述に対応する。地質調査所 (geological bureau) 作成の地図とは、イエール大学バイネッキ貴重書・手稿図書館所蔵の Topographical map of the Japanese Empire, 1899 (1899年の100万分の1「大日本帝国地質図」) を指す（請求記号57 1899A）(1 map on 15 sheets)。海軍省作成の地形図については未詳（原文 Army and Navy Departments）。後考に俟ちたい。
- (4) E. Papinot, *Dictionaire d'Histoire et de Geographie du Japon. 2d Edition.* - Tokyo, etc., 1907. この英訳は E. Papinot, *Historical and geographical dictionary of Japan*, Tokyo, 1909. ちなみに朝河はパピノの辞典（1907年）の書評を *The American Historical Review*, Vol. 13, No. 1, 1907, pp.151-152 に書いている。
- (5) 原文は Captain F. Brinkley, *Oriental Series : Japan, Its History, Art and Literature.* In 12 vols. See vols. 1-4. Boston, 1901-2. ブリンクリーについては拙稿「朝河貫一とジョン・ケアリー・ホルの往復書簡の紹介 — 1910年代英語圏における日本史研究と日本アジア協会の歴史家 —」（『立教大学日本学研究所年報』16号、2017年）注（20）も参照。
- (6) 朝河は同書の書評を書いている。K. Asakawa, Le Japon: Histoire et Civilisation by Marquis de la Mazelière, *The American Historical Review*, Vol. 16, No. 1, 1910, pp. 134-136.
- (7) Wenckstern, Friedrich von, *A bibliography of the Japanese Empire*, Vol. 1: 1477-1893, Vol. 2 comprising the literature from 1894 to the middle of 1906 (XXVII-IXLth year of Meiji) 第一巻は1477-1893年とあるが、特に1859年以降の欧語文献を中心とする。フランスの日本学者レオ

ン・パジェス (Léon Pagès) による1859年刊行の書誌 (*Bibliographie japonaise*) を付録として掲載しており、ヴェンクシュテルン自身は1859年以降の欧語文献を中心にまとめている。第2巻にはその補遺・修正に加えて、バルムグレン (Valfrid Palmgren) によるスウェーデン語の日本関係文献目録が載録されている。復刊『大日本書誌：1894-1906』(ゆまに書房、1998年)。Friedrich von Wenckstern (1859-1914) はドイツ人だが、パリで学び、ロンドンのキガン・ポール・トレンチ・トリュブナー社 (Paul Keegan, Trench und Trübner) の東洋部に勤務しながら『大日本書誌』第一巻(外題には「大日本書史」、第一巻とは記されず)を編集した。初来日は1903年で、1909年まで第五高等学校(熊本)でドイツ語・英語とラテン語を教えた。上村直己「『大日本書史』編者ウエンクシュテルン」(『書誌索引展望』8巻2号、1984年)、藤津滋生「外国語による日本研究文献の書誌学的研究」(『日本研究』10集、1994年)、平田論治「日本教育対外紹介の通時的把握の試み——戦前の欧文日本関係書誌をめぐって——」(平成11-13年度科学研究費補助金研究成果報告書『教育交渉史における日本教育観の形成と展開』(研究代表者=佐藤尚子)2002年)。

- (8) *Transactions of the Asiatic Society of Japan* この雑誌については、Douglas Moore Kenrick, A Century of Western Studies of Japan, the first hundred years of the Asiatic Society of Japan 1872-1972, *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 3ed ver. Vol. 14, 1978. (邦訳はダグラス・M. ケンリック著(池田雅夫訳)『日本アジア協会100年史：日本における日本研究の誕生と発展』横浜市立大学経済研究所、1994年)、前掲拙稿「朝河貫一とジョン・ケアリー・ホルの往復書簡の紹介」。
- (9) *The transactions and Proceedings of the Japan Society* ジャパンソサエティ(日本協会)(The Japan Society)として知られる。詳細は、ヒュー・コータツツイ、ゴードン・ダニエルズ編(大山瑞代訳)『英国と日本：架橋の人びと』(思文閣出版、一九九八年)。
- (10) *Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft fur Natur- und Volkerkunde Ostasiens* ドイツ東洋文化研究協会(OAG)は、横浜でイギリス人を中心として日本アジア協会が結成された翌年、1873年3月22日、在日ドイツ人たちによって東京で設立された。初代会長は、ドイツ弁理公使のマクシミリアン・A・S・フォン・ブラント(Maximilian A. S. von Brandt)が務め、その後も代々の駐日ドイツ大使が会長・名誉会長となった。協会の目的は、在日ドイツ人たちによる日本・東洋に関する研究の場を提供し、ドイツ語圏の人たちに日本を紹介することにあり、1873年創刊の雑誌『ドイツ東洋文化研究協会会報』(MOAG)(ドイツ語)を刊行し、現在まで日本の社団法人として存続している(社団法人化は1904年)。以上は、スヴェン・サーラ、クリスティアン・W・シュパング「ドイツ東洋文化研究協会(OAG)の東アジア研究」(田嶋信雄・工藤章編『ドイツと東アジア——一九四〇—一九四五』東京大学出版会、2017年)。
- (11) *Revue Française du Japon* 一八八六年設立の仏学会(現在の日仏協会)(La Societe de Langue Française)による。日本政府法律顧問G・ボワソナードが関与し、全文フランス語で書かれた日本でおそらく最初の雑誌である。刊行期間は1892年から1897年。丸善雄松堂より復刊(2007年)、白鳥義彦「明治期の日仏関係と『佛文雑誌』」(『日仏教育学会年報』6号、1999年)。
- (12) 1873年9月に第1回目がパリで開催された「国際東洋学者(オリエンタリスト)会議」(International Congress of Orientalists)(現在のアジア・北アフリカ研究会議 International Conference for Asian and African Studies)とその会議録(Transactions)を指すと考えられる。

第1回はフランスにおける日本学の開拓者であったレオン・ド・ロニを議長としてパリで開かれたが、第2回はロンドン、第3回はサンクト・ペテルブルグというように、各国都市で開催された国際学会であった（第二次世界大戦後は相次いでヨーロッパ以外の地で開かれるようになった）。高田時雄「国際東洋学者會議について」（『復刻版 国際東洋学者會議會議録 全11巻 第一期1873年～1881年』（エディション・シナプス、1998年）附録）参照。但し、朝河の原文は *Congrès International Des Études d'Extrême-Orient*（国際極東学会會議）である。同名の會議は、フランス極東学院（École française d'Extrême-Orient (EFEO)）（1898年設立）によって1902年に第一回がベトナムのハノイ（Hanoi）で開催された。朝河がこちらと混合している可能性が想定されるが、後考に俟ちたい。

(13) *T'oung Pao* 1890年にオランダで創刊されて現在まで続く『通報』は、初めての中国学・東洋学の国際的な学術雑誌である。正式名称は *T'oung Pao ou Archives pour servir à l'étude de l'histoire, des langues, de la géographie et de l'ethnographie de l'Asie Orientale (Chine, Japon, Corée, Indo-Chine, Asie Centrale et Malaisie)*（通報：東アジア（中国、日本、朝鮮、インドシナ、中央アジア、マレーシア）の歴史、言語、地理、民族誌および芸術に関する研究のための記録）である。東洋言語専門学校（現・東洋言語文化学院）教授で東洋学者アンリ・コルディエ（Henri Cordier）とライデン大学教授で東洋学者グスタフ・シュレーゲル（Gustaaf Schlegel）の2名が編集長を務めるなど、フランスとオランダからそれぞれ編集長が出る体制をとっており、英語・仏語・独語の論文が掲載されていた。

(14) *Ost=Asien* 「ドイツ語の月刊総合雑誌『Ost=Asien』は、1898年（明治31）4月号から1910年（明治43）2月号までベルリンで刊行された。発行者は玉井喜作という日本人であった。玉井没後の1906年11月号以降は、老川茂信により継続刊行されている。」（後掲、泉論文（4）八一頁）という。泉健氏が基礎研究を発表している。泉健「『Ost=Asien』研究（その1）全目次」（『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』五二号、二〇〇二年）、以下、同「『Ost=Asien』研究（2）人名注解；外国人編」（同右、五三号、二〇〇三年）、同「『Ost=Asien』研究（3）人名注解；日本人編」（同右、五四号、二〇〇四年）、同「『Ost=Asien』研究（4）全目次；独語版」（同右、五四号、二〇〇四年）。玉井喜作については泉健「ベルリンの玉井喜作」（『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』五五号、二〇〇五年）、同「文献に見る玉井喜作」（同右、五六号、二〇〇六年）、老川茂信については泉「ベルリンの玉井喜作」三二頁以下。

(15) 以下、イエール大学所蔵の図書・古文書については、国文学研究資料館文献資料部「イエール大学蔵・日本文書コレクション目録」（『調査研究報告』11号、1990年）、東京大学史料編纂所編『イエール大学所蔵 日本関連資料 研究と目録』（勉誠出版、2016年）、現在のイエール大学図書館については蔵書検索システム Orbis (<https://orbis.library.yale.edu/vwebv/>) を参照した。なお、本稿執筆にあたってイエール大学図書館および議会図書館で所蔵資料の調査を行うことはせず、目録などの参照にとどまった。所蔵資料の確認は今後の課題としたい。

「古文零聚」（*Kobun reishū*）はイエール大学図書館にあるが（BEINECKE, EAL J0073（請求記号））、『イエール大学所蔵日本関連資料』目録にはみえない。但し、1907年のブックプレートをもつこと、この論文（以下 Profit 論文）で朝河自身が言及していることから、朝河の蒐集資料である蓋然性が高い。朝河の蒐集資料の全てがイエール大学図書館の日本コレクションの目録に含まれている訳ではないことについては、松谷有美子「朝河貫一が集めたイエール大学図書館および米国議会図書館の日本資料—書簡を手がかりとして」（池谷のぞみ

他編『図書館は市民と本・情報をむすぶ』勁草書房、2015年）38-39頁に指摘があるが、Profit 論文は従来知られていなかった朝河の蒐集資料の一端が分かるという点でも興味深い（イエール大学東アジア図書館ライブラリアンの中村治子氏のご教示によると、日本コレクション（バイネッキ（BEINECKE）所蔵で Call Number の最初に Japanese Mss と含まれるもの）は朝河が1907年に収集し、バイネッキ貴重書・手稿図書館に所蔵されたものだが、朝河が収集した書籍や貴重な江戸の版本などの一部はスターリング記念図書館（東アジア図書館）の特別コレクション（East Asia Library Special Collection）の一部として保管されてきており、近年にそれらをバイネッキに移動した、という。BEINECKE 所蔵で Call Number の最初に「EAL J」と含まれるものである）。

なお、東京大学史料編纂所架蔵謄写本「東寺古文零聚草」（請求記号：2071.62-7）には奥書に「右和歌山市長澤六郎氏所蔵本学既ニ東寺文書影写ヲ蔵スルヲ以テ写サス只本書五冊最初ノ六枚ハ伴信友ノ解説ニ関スルヲ以テ明治三十八年七月謄写ス」とあることからみて、朝河は独自に古文零聚の写本を入手したことが推測できる。朝河蒐集本と1906年の吉田篤行写であるという国立国会図書館所蔵「東寺古文零聚」8巻本との関係は今後の検討課題としたい。

- (16) 明治34年（1901）12月発刊『大日本古文書卷之二』の「大日本古文書例言」には、「大日本古文書ハ、史料編纂掛ノ蒐集セル古文書ヲ印刷スルモノニシテ、其最モ古キハ大宝二年ニ始マレリ、大約二百冊ヲ以テ完結セシムル予定ナレドモ、向後尚ホ材料ヲ搜索、淘汰スベキニヨリ、多少ノ増減ヲ免レザルベシ」とある（東京大学史料編纂所編『東京大学史料編纂所史史料集』東京大学出版会、2002年、262頁）。2020年7月現在232冊刊行済で、なお刊行中である。
- (17) 応永三十二年具注暦・元徳二年後宇多院七回忌曼荼羅供記を指すか。但し、応永三十二年は1425年なので、1423-24年という朝河の表記と微妙に異なり、別の資料である可能性は否定できない。後考に俟ちたい。本文中で言及されている「平氏文書」・「下京文書」とともに、詳しくは前掲・『イエール大学所蔵 日本関連資料 研究と目録』所収論考参照。
- (18) BEINECKE, EAL J1849（請求記号）朝河は the soku-kyo hen と記すが、現在のイエール大学図書館には Sokkyohen, Sokukyohen として登録されている。『イエール大学所蔵日本関連資料』目録にはみえないが、Profit 論文で言及されていること、袋綴本の西洋風に製本し直した点（Bound in Western style）などから、朝河の蒐集資料である蓋然性が高い。前掲注（15）「古文零聚」と同じ事情であろう。
- (19) 『大谷本願寺通記（紀）』は15巻本だが、イエール大学図書館本（*Ōtani Honganji tsūki*）は巻1～8の「下」（「上」の誤りと Orbis に注記）と巻9～15の「上」（「下」の誤りと Orbis に注記）の二つに分かれている（BEINECKE, Japanese Mss B35（請求記号））（『イエール大学所蔵日本関連資料』213頁）。計7巻の「上」だけを指して7巻本と勘違いしたのだろうか。後考に俟ちたい。

なお、玄智筆「大谷本願寺通記稿本」（寛政三年（1791））は、仏書刊行会編『大日本仏教全書 第132冊』（1912年）、大正3年の「真宗全書」妻木直良編『真宗全書 第68巻』（国書刊行会、1914年）で活字化された。朝河は西本願寺の親本しか写本がなかったと述べるが、同書の写本については、藤島達朗「大谷本願寺通記について」（『奈良大学紀要』3号、1974年）77頁。イエール本は15本であることを考えれば、良質の写本と考えられるが、今後

(40)

の課題としたい。龍谷大学創立380周年記念書籍編集委員会編『時空を超えたメッセージ：龍谷の至宝』（法蔵館、2019年）66-67頁も参照。

- (20) *Annual report of the Librarian of Congress 1907*, p.28, “the *Kōya-san fū-do ki*, a history of the great historic Buddhist monastery on Mt. Kōya, copied from the original kept by the monastery”

なお、『高野山風土記』は正確には『紀伊続風土記 高野山部』であろう。議会図書館 Japanese Rare Book Collection に *Kii zoku fudoki. Kōyasan no bu* (紀伊續風土記 高野山部) 66 卷ならびに *Kōyasan sōwakekata fudoki* (高野山總分方風土記) 21卷、*Kōyasan hijirigata fudoki* (高野山聖方風土記) 1 卷があり、「約百卷」という朝河の記述と微妙に異なるが、こちらに対応するものか（現在の議会図書館の蔵書は次の検索システムを利用した。https://catalog.loc.gov/）。米国議会図書館蔵日本古典籍目録刊行会編『米国議会図書館蔵日本古典籍目録』（八木書店、2003年）260頁によれば、高野山部と總分方とも1908年8月収蔵、洋装（袋）とのことである。

『紀伊続風土記』は幕府の命令をうけた和歌山藩が、文化3年（1806）に、藩の儒臣であった仁井田好古を総裁にして編纂を開始した紀伊国の地誌で、33年の歳月をかけて天保10年（1839）に完成した。全195巻のうち、「高野山之部」60巻、「高野山總分法目録」21巻（『紀伊続風土記』和歌山県神職取締所発行、1910年）という。『国書総目録』によれば、内閣文庫に明治期の写本で『高野山風土記』と題する60巻本があり、『紀伊続風土記 高野山部』と同じものなので、朝河が書写した写本を考える手がかりになるかも知れない。後考に俟ちたい。何れにせよ『紀伊続風土記 高野山部』の所謂「原本」ではないので、朝河の原文 the original は「底本」と訳した。なお、イエール大学図書館には1911年刊行の刊本『紀伊続風土記』が所蔵されている。

- (21) 朝鮮通交大紀 (*Chōsen tsūkōdaiki*)、BEINECKE, EAL J1850 (請求記号) 『イエール大学所蔵日本関連資料』の目録には記載がないが、Profit 論文で言及されていること、10巻本を西洋風に製本し直した点 (Bound in Western style) などから、朝河の蒐集資料である蓋然性が高い。前掲注 (15) 「古文零聚」と同じ事情であろう。

- (22) 人倫訓蒙図彙 (*Jinrin kinmō zui*)、BEINECKE, Japanese Mss D190 (請求記号) 朝河は6巻本とするが、本来や7巻本で、現在 Yale に所蔵されているものも7巻本である。朝河の勘違いだろうか。次注も参照。

- (23) 議会図書館での報告においても『人倫訓蒙図彙』が言及されている。*Annual report of the Librarian of Congress 1907*, p.27, “the *Zhin-rin kinmō dzu-e*, the rare and important illustrated work on the various occupations of the Tokugawa period, printed probably about 1700”. 現在の議会図書館にも7巻本の *Jinrin kinmō zui* (人倫訓蒙図彙) が所蔵されている (Asian Reading Room, DS822.2 .J56 1690 Japan Cage (請求記号))。但し、議会図書館本は第1巻が欠巻で (第2巻に「巻一、巻二」の表示があるが、「巻一」は誰かが誤って書き加えてしまったものらしい)、6巻だという (https://lccn.loc.gov/00696220 (最終閲覧日2020年7月30日))。『米国議会図書館蔵日本古典籍目録』9頁も6冊本で、「近代複製本」とする。前掲注で指摘したように朝河が6巻本だと「勘違い」したことと関係するのかも知れない。議会図書館用の資料と同時に作成された複製であると考えられるので、イエール大学所蔵「人倫訓蒙図彙」の実物も調査する必要があるが、今後の課題としたい。

- (24) *Annual report of the Librarian of Congress 1907*, p.27, “The class of handillustrated scrolls known

as e-maki-mono, some of which are among the most valuable historical material of Japan, is represented in our collection by a few duplicates”.

- (25) 朝河の Profit 論文はワシントン大学図書館の HP 上で公開されている。https://journals.lib.washington.edu/index.php/WHQ/article/viewFile/4776/3866 (最終閲覧日2020年7月31日) *Washington Historical Quarterly* は西海岸シアトルのワシントン大学歴史学部を拠点として、1906年創刊された雑誌である。1935年には太平洋地域を中心にした *Pacific Northwest Quarterly* (『季刊太平洋岸北西部』) に改められている。ワシントン大学は現在でもアジア・日本研究の拠点として知られており、英語圏における日本研究の人文社会科学系総合学術雑誌として知られる1974年創刊 *Society for Japanese Studies* も事務局をワシントン大学に置く。
- なお、朝河貫一書簡編集委員会編『朝河貫一書簡集』(早稲田大学出版部、1991年) 43-47頁に著作目録があるが、Profit 論文は抜け落ちている。Profit 論文のコピーは、イエール大学図書館所蔵 Asakawa Papers に1部残されている (Box.7, Fol.69)。Asakawa Papers については拙稿「イエール大学図書館所蔵朝河貫一文書(朝河ペーパーズ)の基礎的研究」(山岡道男ほか編『朝河貫一資料 早稲田大学・福島県立図書館・イエール大学他所蔵』早稲田大学アジア太平洋研究センター、2015年、初出2009年)。解題で述べるように、歴史的に重要な資料であると考えて本稿で紹介する次第である。
- (26) 2020年7月18日に筆者は第117回朝河研究会(共催「グローバルヒストリーのなかの近代歴史学」第14回研究会)において「朝河貫一は日本封建制論の有用性をどのように主張したのか：20世紀初頭の議論を中心にして」という報告をおこなったが、Profit 論文を素材にして、朝河が自らの研究をどのように位置づけていたのか、その戦略を考察した。その報告自体は別稿を準備中である。
- (27) 必ずしも一般的な言い回しではないように思われる。他の解釈としては、「効果的(効率的)に」というニュアンスもあるかと思われるが、断定できない。
- (28) 朝河自身、日本の友人たちの手紙の中で、アメリカにおける日本史研究の不利を語っている。だが、その一方で、アメリカにおける日本史研究の強みを語るのが朝河であった(後掲注(35))。
- (29) 朝河の図書蒐集については阿部善雄『最後の「日本人」』101-106頁、松谷有美子「朝河貫一によるイエール大学図書館および米国議会図書館のための日本資料の収集」(『Library and information science』72号、2014年)同「朝河貫一が集めたイエール大学図書館および米国議会図書館の日本資料—書簡を手がかりとして」(池谷のぞみ他編『図書館は市民と本・情報をむすぶ』勁草書房、2015年)、東京大学史料編纂所編『イエール大学所蔵 日本関連資料 研究と目録』(勉誠出版、2016年)。松谷有美子「イエール大学図書館の日本資料コレクションに関する最近の研究動向」(『カレントアウェアネス』330号、2016年)。朝河と図書館の関係については、和田敦彦『書物の日米関係：リテラシー史に向けて』(新曜社、2007年)とともに、松谷氏の研究によって近年大きく進展している研究領域である。
- (30) 朝河の事績については、阿部善雄『最後の「日本人」』(岩波現代文庫版、2004年、1983年刊行)、山内晴子『朝河貫一論 その学問形成と実践』(早稲田大学出版部、2010年)など。
- (31) 金子英生「朝河貫一と図書館の絆」(朝河貫一研究会編『朝河貫一の世界：不滅の歴史家偉大なるパイオニア』早稲田大学出版部、1993年) 226頁。
- (32) *Report of the Librarian: 1907-1908 [Yale University. Library]*, p.9. なお、p.42に Curator として

(42)

朝河の名が記されている。

(33) *Report of the Librarian: 1907-1908*, pp.9-10.

(34) この点に関しては別稿で詳しく論じる予定である。

(35) こうした自負は、日本の友人宛の書簡のなかに散見される。たとえば、1912年1月20日の三上参次宛書簡（前掲『朝河貫一書簡集』五〇号、186頁）。

(36) 高田時雄「国際東洋学者會議について」（『復刻版 国際東洋学者會議會議録 全11巻 第一期1873年～1881年』（エディション・シナプス、1998年）附録）4頁。

(37) 以下の本節の記述は（大久保・福田の博論の書誌情報など含めて）、拙稿「大久保利武・利謙父子の学問形成と蔵書：立教大学図書館・学習院大学史料館所蔵「大久保文庫」（拙編『明治が歴史になったとき：史学史としての大久保利謙』勉誠出版、2020年）174・175頁。

(38) 朝河はマズリエルの書評を書いているように（前掲注（7））、フランス語の読解力はあったと思われるが、ダートマス大学で学んでいたのはドイツ語であった。1908年の段階ではフランス語圏の研究動向に疎いところがあったのではなかろうか。但し、イエール大学図書館にこの2つのフランス語雑誌の所蔵がみえないことから、当時のイエール自体がフランス語圏の東洋学に弱かったという面もあったのかもしれない。Profit 論文で朝河が言及している『通報』も、フランス語とともに英語・ドイツ語の論文を掲載する国際的な学術誌である（前掲注（14））。朝河の比較史におけるフランス（封建制）の位置づけについては、拙稿「朝河貫一と比較封建制論 序説：個人資料に基づく史学史研究の試み」（『歴史評論』732号、2011年）、拙稿「『入来文書』の構想とその史学史上の位置：日欧の中世史研究からみて」（海老澤衷他編『朝河貫一と日欧中世史研究』吉川弘文館、2017年）95-101頁。

(39) 南明日香「フランス語に翻訳された「日本文化」」（和田桂子他編『満鉄と日仏文化交流誌『フランス・ジャポン』』ゆまに書房、2012年）302頁。同書にはフリドマン日出子「『パリ日仏協会会報』解題」と同編「『パリ日仏協会会報』総目次」も収録されている。

(40) 前掲・平田論治「日本教育対外紹介の通時的把握の試み」256頁。

(41) *Report of the Librarian: 1907-1908*, p.10. 阿部善雄『最後の日本人』105頁。なお、牧野伸顕の実弟大久保利武はイエール大学留学経験があり、のちに朝河と協力することになる。拙稿「大久保利武・利謙父子の学問形成と蔵書」175・176頁のほか、山内晴子「朝河貫一と日本イエール協会コレクション」（『朝河貫一研究会ニュース』92号、2018年）

（さとう ゆうき 立教大学准教授）

【付記】本研究はJSPS 科研費 JP18KK0335, JP19K02461の助成を受けた。